

変体漢文の構文論的研究 ―受身文の旧主語表示を例に―

田中草大

本発表は、「変体漢文はどのようにして日本語文を書き表しているのか」という問題意識を前提とする。音声言語とは異なり書き言葉においては表記上の特徴や選択（＝表記体）が、書かれた結果の文章の特徴（＝文体）に影響を与える。中国語文式に日本語文を綴る変体漢文という表記体においてはこのことが殊に顕著であり、その影響は「構文」のレベルにまで及んでいる。しかし現状ではその実態（変体漢文という表記体とその構文に与える影響）は未解明の点が多く、事象ごとの記述が求められている段階である。

そこで本発表はその一環として、変体漢文における受身文が旧主語（動作主。Xガ Yニ Vサレル）をどのように表示しているかを解明することを目的とする。助詞の表記に制約のある変体漢文における当該事象の実態を探ることは、書き言葉における表記体と文体との関係を理解する上で有益と考えられる。

平安時代の文書を主たる対象として調査を行った。その結果、旧主語の表示形式は主に「～ノタメニ（為）」が行っていること（例：薬師堂為大風被吹倒）を確認した。「～ニ」の例もあるが、文脈に頼るものが多数派であり方式としては発達していない。併せて「～ノ…スルトコロナリ」（例：子細，皆万人所_レ知也）が補助的な役割を担っている可能性を指摘した。なおノタメニは今昔物語集など中世和漢混淆文にも使用例があるが、変体漢文では無生物の旧主語にも使用できるなど、用法の上で異なる部分がある。

ノタメニは、変体漢文において助詞ニが表記しにくいという制約に対処するための代替的語法と捉えられるが、ニを問題なく表記可能な和漢混淆文でも用いられる。これは、制約に起因する語法が文体的特徴となったと見なし得る。またこの語法は近世・近代の文語文にも使用され、近代口語文にも例がある。（口語文形成にも繋がる）文語文の史的展開を理解する上で、変体漢文の語法を把握することが有益であると言える。